

失われたふるさと

早船ちよ 林田恒夫写真

サロルンリムセ



サロルン・リムセ
昭和51年2月1日初版発行

早 船 ち よ ©
林 田 恒 夫 ©

発行所 株式会社 童 心 社
東京都新宿区三栄町22
電話(357)4181 振替 東京75504

写真植字 東京光画株式会社
製版・印刷 小宮山印刷株式会社
製本・株式会社難波製本所

B5変型・21cm・96P・NDC913.6
0393—780180—5253

サロルンリムセ

— 失われたふるさと —

早船ちよ 林田恒夫写真





サロルン・リムセ

——失われたふるさと——

早船ちよ
林田恒夫写真





プロローグ

おれは みたびまた もどってきた
ユキ！ おまえに あいに。

釧路湿原 チルワツナイに

あれから また十年の歳月が 流れている。

見わたすかぎりの 地の涯で

白い雪原が ひろがっていく。

白い幻想に 紫の影を落とす

タンチョウヅルの つがいは

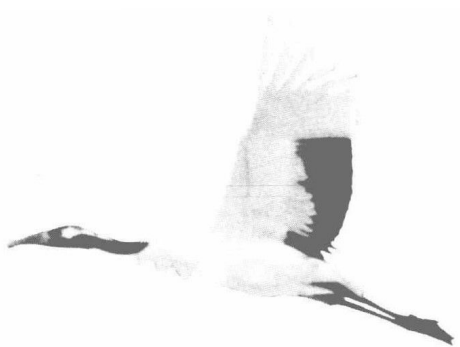
華麗な羽を 羽ばたき

羽ばたき 飛翔し とび交わし

愛のデイスプレーを 乱舞する。

—— ルルウ、ルルウ……ルウ。

ひそやかに 甘い ふくみ鳴きを
鳴きかわし のどをふくらし



—— ルルウ、ルルウ……ル、ル。

タンチョウヅルは 舞う。

ユキは、アイヌ・メノコの彫^ほりのふかい、つぶらな瞳をみはり、のどを手でつまんで、いきばって、タンチョウヅルを呼ぶ。

—— ルルッ！ クルルルッ！ ルッ！

愛よ、おいでよ。ほうら、あたしも、いい声でしょ。

ツル、ル、ルル！

—— あたしが うたうと、たくさんの愛が、つばさをひろげてくるのよ。

ほうら。ね、ね。

ツ、ル！ ツル、ルルルルッ！

ユキの呼びごえに さそわれ

雪の原野に、二わ、四わ、また三わ……。

タンチョウヅルが

そろいの赤いベレー帽で とんでくる。

いつのまにか タンチョウヅルの つがいは、

無数のつがいの大群に ひろがり。

壮麗な デイスプレーを 展開する。

愛、—— はてしない雪原の、

愛、—— 遠い とおい空の、

プラチナいろの光と

むらさきの影が 交叉する。

—— 雪原は 時間のない国。



ユキは、どこへ いってしまったのだろう。
幻影が、光り とび交い 翳る かなたに、
ツルは、どこへ 消えていったろう。

かん高い声が ゆつくりと ひびいてくる。

—— タンチヨウツルは

銀盤の パレリーナ。

ここ 北海道の道東・釧路湿原にしかすまない
世界の どこにもいない鳥よ。

ユキの声は、ふふつと、ふくみ笑いにかわる。

—— ツルたちね、これから恋の季節にはいます。

だから、ほら、いつまでたっても、おどりやめないの、
いとしいひとよ、おいでと。

ユキは、アツシのすそを両手で、つばさのようにひろ
げて、白い祭場へいく。そして アイも。

ユキそつくりの少女は、アイと よびます。

アイは、ツツーと、氷盤をすべってきて、向かいあう。

ユキと アイ。

アイと ユキ。

ふたりは、ぱつとアツシをかぶって、アツシのすそを
両手でもって、ツルが羽ばたくしぐさをまねる。

ユキそつくりのアイが、のびやかに唄う。

——ルルッ、ルルウーン。

サロルン・リムセは、アイヌのことばで

ツルの舞いをいいます。

ユキが、かん高い調子で、

——愛しあう、ふたりのおどり

愛のおどりよ、サロルン・リムセは。

無数のタンチョウヅルが、

踊り手ふたりのまわりに むらがる。

ツルたちは、踊り手をまるくかこみ

手びょうしをとって ウポポを うたう。

ムックリを ^{*}ならすのは だれ？

トウロ湖のほとりの、菱^{ヘシベ}の実祭^{マツリ}りを見ましたか？

サロルン・チカツプ・リムセが、いま、アイヌのカム
イにささげられるのです。

フントリ フン チカツプ

アーホー アーホー ホーオー

ツルたちは羽ばたいて、いつせいに、天に首をさしの
べる。

——ルルルル、ルウ……。

——ル、ルルル、クックル——！

ユキと少女は、向かいあい、首をかしげてうなづき、
大空をあいおいで、「ルルル、ルルウ！」と、ツルの鳴
きこえを、鋭くなく。



装丁・辻村益朗

サロルン・リムセ

—— 失われたふるさと ——





——おれは また もどってきた 釧路湿原へ。
セスナ機の 爆音が ひびく。

——そうだ。あれは ちょうど 十年前

一九六六年十一月二十日、午前十時十五分前だった。

新釧路川ぞいの低空、重たい雲の下を

タンチョウヅルいつせい調査観測のセスナ機が、ゆっくりと迂回^{うかい}している。

一望、雪と氷にとざされた釧路湿原に

セスナ機は鳥、青い影を羽ばたく。

